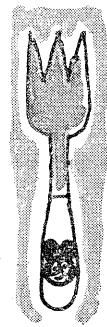


# 子どもの生きがい



萩尾藤江

何もかも初めての育児という体験、これもどうやら一年十ヶ月が経過しました。この間感じることは、育児とは親が子どもを世話するということも、親がそこがかかわったり、また親が用意した状況に子どもがかかわり、そこで新たな状況が生まれ、親子共に変化していく、そんなダイナミックなかかわりが育児だと思うのです。ですから子どもの生きがいを考えるにあたっては、それをかなり流動的なものとしてとらえてみたいのです。子どもは一刻一刻を充実して生きていますので、その意味で毎日の生活そのものが生きがいとっていいと思います。子ども自身感じる生きがいは、親の私がそばで感じるものとはまた違うものだと思いますが、毎日の時間の流れの中で子ども自身が行動をおこし、充実し、発展し、また次の行動へ移るといふ一まとまり、それは親か

ら見て子どもが生き生きしているなと感じやすいときなので、そこに焦点をあてて考えてみたいと思います。

## 生き生きした気持ちが育つとき

子どもが生き生きとしているときは、自分で何かをしているときです。自分自身の力で遊具や人に向かって何かをする、そんなときです。子どもが何かをしようとするときは、身体的にも健康な状態にあり、自分のしようとすることを妨げられず気分的に安定しているときのようなです。乳児期ならば泣かないでいられる時間が多いことが安定した時をすごしていると言えるでしょう。子どもがやりたい、満たされたいという気持ちで行動をおこし、それが満たされないと泣くという形で不満を訴えたとき、乳児期で

したらほとんどそれは満たされ安定した気分すぐに戻れる。このような体験が子どもの生き生きした体験をするための必要な背景となっているようです。

歩きはじめて行動範囲が広がってくるころになると、もう一つ、行動をおこすための背景としては母親とのつながりが考えられます。私共の息子は人見知りが強く、長いこと知らない人となじむまで泣いたりしましたが、はじめは泣いていても、母にだっこされれば笑っていられる↓そばに母がいて、知らない人がただそばにいただけでだいたりされなければ平気↓母の背中にかくれながらもじっと知らない人を見る↓母がいれば知らない人と一緒に平気、というように変化してきて、母親を何かあつたら逃げこめる安全な場所のようにとらえだしてから、少しずつ行動が広がってきたように思えます。ですから新しい体験も、逃げ戻れる安全地帯があるという安心感からより広がりを持っていけるように思えます。

次に一歳十ヵ月現在の子どものような場面でもより生き生きとしているかを、いくつかあげて母親とどうかかわるかを考えてみたいと思います。

### 驚くことと驚きを共感してもらうこと

歩くことも手の操作も、そして言語もかなりしっかりと自分のものになりつつあるこのごろ、朝から寝るまでが、「ママ！」「の連続です。おはして何とかおそばが食べられたとき」「ママデキタヨ」「外で小さなムシが這っているのを指先で追って」「ママ！」「ムシムシ」「積木が一つ積めるごとに」「ママ！」「タカイ」、全く母親としてはまたかと思うことに一つ一つ驚きを示し、それをまた承認してもらうまで満足しないのです。大人にとってはできで当然同じことの繰り返しなのですが、子どもにとっては一つ一つが新しい体験でありそれが驚きになっているようです。これをまた一つ一つ受けとめてもらうことで新たな驚きを生むのです。遠くからでもいいから「そう、すごいわね、上手ね」の一言が子どもの喜びにつながると思うのですが、つい一瞬の時をおしんで結果的に子どもを泣かせてしまつて、ああ悪かったと思うのです。

### 子どもの行動には意図がある

この驚きながら次々と新しいことをしていく子どもの動きは、時として母親のつもりと対立することがあります。このごろ、何でも母親や年上の近所のお姉ちゃんたちのすることに興味を示し、やってみたがるが多くなったのですが、先日お姉ちゃん

たちとままごと遊びをしていて、「おべんとう」と称してふたの  
できる容器にブロックをさかんにつめていたのを見ていたのです  
が、お姉ちゃんたちの帰ったあと、私がちよっと目を離れたすき  
に台所のテーブルの上においてあった密閉容器の中のもの全部  
出して、さかんにブロックを入れようとしているのです。とっさ  
に、「メッ」と取り上げると、おこって「ママ！メッ」とやり  
かえします。昼間のことを思い出して「おべんとう？」と聞くと  
「ウン」とうなずくので、その場合は別のアルミ箔容器を与えてお  
さめました。

このように、親にとつてはされては困ることも、子どもにとつ  
てはつもりがあつたことなので困ってしまいます。結果をみ  
ただけですぐに「メッ」とおこるとワーと泣き出して、その遊び  
はつぶれてしまいます。すぐに「だめ」と言わないで、「これなら  
いいけどこれはだめ」と言うようにしたら、遊び自体もまた新し  
くなります。「おべんとうつくり」の遊びも、新しいアルミのい  
れものをへこませて、そこにピンポン玉を入れてたまご入れにな  
りました。驚きを受け入れるときもそうですが、叱るときもほん  
の一瞬、まわりを見たり、一息入れるようにしたら子どもの意図  
をくみとれるのではないのでしょうか。つい「ダメ」が先に出てき  
てしまつて反省することが多いのです。

子どもが成長してくるにつれて、ますますこのようなトラブル  
が増えてくるでしょうが、これを、二つの違った意図が出会つた  
と考え、そのそれぞれが生かされながら、新しいものができあが  
るようにかかわっていきたいものと思います。代りの容器を使う  
ことにより子どもは新しい遊びを展開させ、母親は散らかされる  
と困るものを確保し、更に子どもの発展につながるかかわりかた  
を体験でき、二人共それなりに新しい体験ができたと思います。  
そしてこのようなかわりの中で子どもは生きがいを感じるの  
ではないかと思えます。

こうして考えてくると、子どもの生きがい、それは大人にとつ  
ても同じだと思ふのですが、常に新しいものへ向かおうとする  
力、それを出しながら動いているときのようです。それは自分自  
身でみつかるものもあるでしょうし、まわりの遊具や人とかかわ  
ることでみつかるものもあるでしょう。とにかくのびていこうと  
しているこの芽をのばしながら、親としても共に新しくなりたい  
と願っております。